

隋の暦学者袁充とその周辺

——仁寿年間における舍利塔建立の一背景——

今 西 智 久

はじめに

隋の文帝楊堅は、仏教を信仰し、仁寿年間（六〇一―六〇四）に三度にわたって舍利塔を建立した。文帝の「仏教治国策」^①の最後を飾る一大事業として、これまでに多くの研究がものさされている。しかしながら、これまでの研究においては、この事業が仁寿元年に始められた理由を説明して来なかったように思われる。この事業は、確かに文帝の仏教興隆事業の延長線上にあるものではあるが、その形態は、開皇年間の興仏事業とは聊か趣を異にしており、文帝の仏教政策の延長という点だけでは捉え難いものがある。

ところで、この事業を知る上で不可欠な文献に、隋の著作郎王劭が編纂した『舍利感應記』がある。王劭は、文帝の仏教政策の一翼を担った人物であるが、一方で、屢しば符命を説いて文帝を悦ばせた臣であった。^②文帝の仏教政策は、王劭に類する朝臣の言説が反映されるものであったことが窺われ

る。

本稿は、そのような文帝の臣の一人である暦学者の袁充を組上に、舍利塔事業が仁寿元年に始められた一つの背景を述べるものである。

一

袁充は『隋書』卷六十九に立伝されているが、同巻には、王劭の伝も立てられている。彼らが同巻に立てられるのは、史臣曰くの条によれば、符瑞や星占を用いて人々を誑かして栄利を求めたとする、魏徴らの批判的な評価による。少なくとも、唐初の史官には、彼らが類同するものと映っていたのである。

袁充は、陳郡の袁氏に連なる江南の望族であり、陳の滅亡に際して隋朝に帰し、「性は道術を好み、頗る占候を解し」たため太史令となっている。天文暦算に通じており、大業暦を作成した張胃玄とは、互いに各々の暦を褒め合うなど、親

隋の暦学者袁充とその周辺（今 西）

密な関係にあったという（『隋書』卷十七）。『隋書』卷十九・天文志上には、袁充が古今稀に見る瑞祥である「日長影短」（一日の日照時間が長くなる現象）が起こつていると上奏したところ、文帝は「景長の慶は、天の祐なり。今、太子新たに立つ、当に須らく改元すべし」と述べ、改元したとある。改元に関わつて、文帝がその言説を納れている所に、文帝の彼に対する信任ぶりが窺われ、開皇末の朝政に大きな影響力をもっていたことが知られる。このような袁充の伝には、彼が仁寿改元直後に文帝に述べた次の言葉がある。「文皇帝が生誕した時には、神光瑞氣や嘉祥が現れただけでなく、干支や行年に至るまで、すべてが天地日月・陰陽律呂のめぐり合わせと表裏合致するものでありました。これは聖人が誕生するめずらしい時であり、宝暦のはじめです。いま、世界の物とともに更新して、仁寿と改元したところ、歲月日干支は、また聖人誕生の時とすべて同じであり、明らかに天地の心に符合し、仁寿の道理を得ています。故に帝王の事業は長久であり、永遠に無窮であることを知るのであります。」彼は、文帝の生誕の日と仁寿元年の誕生日とが、暦数の上で合致し、聖人の誕生する時だと主張する。ここで重要なのは、「いま、世界の物とともに更新して、仁寿と改元した」の部分である。仁寿と改元して世界が更新された結果、再び聖人が誕生するということのである。『隋祖起居注』（『集古今仏道論衡』卷二所引、

TS2, 379a）によれば、文帝は西魏の大統七年（五四一）六月十三日に生まれている。仁寿元年（六〇一）六月十三日は文帝の還暦にあたるが、この日は舍利の頒布が発願された日である。

二

文帝は、史書に「雅に符瑞を好み、大道に暗し」（『隋書』卷二、高祖紀下、史臣曰の条）と評価されているように符瑞を好む性格であつた。彼が符瑞を好んだのは、ひとつには周隋革命の際に、符瑞を説いて受禪直後の人心を捉えようとしたからであり、彼にとって符瑞とは、王朝の正当性に関わる重要事なのであつた。そのため、符瑞を説くものが多く現れたが、それに類するものたちが文帝に寵用されている。以下に少し見ておきたい。

まず挙げられるのは、道士の張賓である。『隋書』卷十七・律曆志中には、楊堅が北周の丞相となつた際に、代謝の徴があると述べ、また楊堅が人臣の相に非らざると称え、大いに知遇されたという。そして、隋朝成立後、樞要の地である華州の刺史に抜擢された。彼は北周武帝の廃仏の首謀者の一人として知られるが、開皇四年に彼が作成した開皇暦は、誤謬を批判されながらも、開皇十七年まで用いられた。それは、文帝の信任があつたからである。『隋書』卷七十三・芸

術伝・来和伝には、文帝の竜潜時に天子となることを予言した道士の焦子順がいる。彼については、『両京新記』卷三・安定坊・五通觀の条に、周隋革命時に文帝が皇帝になることを預言し、その才能から軍事諮問を受けたとある。思うに、曆は王朝の正統を示し、天下を支配する文化的手段であり、軍事はより実効的な支配手段である。文帝は「仏教治国策」を行ったと言われているが、少なくとも、その政治的な立場にあつては、仏・道両教は並立し得るものであつたと言ふべきであろう。『隋書』卷七十三・芸術伝には、さらに文帝と関わった術士が記載されている。例えば、南朝梁代に活躍していた庾季才は、「好く玄象を占」つた人であるが、周隋革命の際には、文帝の即位の日を占ない、文帝はそれに従つたとある。開皇三年の大興城への遷都も彼の提言による。あるいは、梁武帝の兄・蕭懿の孫にあたり、陰陽算術に精通した蕭吉は、隋文帝が即位すると、古今陰陽の書を考定し、後に皇太子楊勇の廃立にあたつて、「太子当に位に安ぜざるべし」と述べ、文帝はその言葉を是とし、これによつて常に顧問されたという。仁寿二年に文献皇后が歿した際には、彼に葬所を卜わせている。

文帝は、符瑞を説く臣を寵し、彼らの言葉に悦び従う所が多かつたが、彼らの言葉は王朝の正当性を証明し、政策に関わるほどの影響力を有するものであつた。

隋の曆学者袁充とその周辺（今 西）

三

舍利塔事業は、『広弘明集』卷十七および『続高僧伝』卷十八・釈曇遷伝によれば、第一回「仁寿元年六月十三日発願、十月十五日舍利埋納、三十州。第二回「仁寿二年正月二十八日発願、四月八日舍利埋納、五十一州。第三回「仁寿四年正月某日発願、四月八日舍利埋納、三十州、として三度行われている。事業の意図に関わるのが、第一回目であることは言うまでもない。そして、第一回の発願日が文帝の誕生日であることはすでに述べた。

この事業における文帝の立場について見てみると、『続高僧伝』卷十八・釈曇遷伝に、「即ち大徳三十人に請い、宝塔を安置し、三十道に為らしむ。建軌の制度は、一に育王に准ず」(T50, 573c)とあるように、阿育王の八万四千塔建立に准ずるように行わせており、自らを阿育王に擬している。また、『舍利感應記』によれば、沙門が各州へ舍利を送る際には、「阿含經の舍利的拘尸那城に入るの法に依」(T52, 214a)つたとある。具体的には『長阿含經』遊行經にいう「轉輪聖王の葬法」を指す。阿育王が轉輪聖王として説かれることは、周知の通りであり、『阿育王經』卷一・生因緣第一に、「世尊又言わく、王となりて阿育と名づけ、四分の轉輪王と為りて、正法を信樂し、当に広く舍利を供養し、八万四千塔を起て、多人を

隋の曆学者袁充とその周辺（今 西）

饒益すべし」と。(T50, 132ab)とある。ところで、『雜阿含經』卷二十三には、「後十五日の月食の時に剋め、此の閻浮提をして、諸々の仏塔を起さしむ」(T03, 168c)とあり、阿育王が十五日に舍利塔を建立したとある。また、『長阿含經』の遊行經や轉輪聖王修行經には、轉輪聖王が具備する金輪は、「十五日の月の満つる時」に現前するとある。第一回の事業での舍利埋納日は「十五日」であるが、これらの日と無関係ではないであろう。『感応記』の同州上表には「臨みて函に入れんとするに、日乃ち出づ。衆色の光相、日を繞りて輪の如し」(T03, 214c)とある。輪の如き衆色の光の発生は、轉輪聖王の金輪出現を連想させるが、同州起塔地の大興国寺は文帝の生誕の地なのである。⁽³⁾要するに、この事業は文帝が阿育王・轉輪聖王となる行為そのものであったと捉えられる。

小結

文帝は符瑞を好み、術士の言葉を悦んだが、彼らの言葉は政策に影響を与え得るものであった。袁充は、そのような文帝に信任された術士であり、開皇末の朝政に影響力をもっていた。その彼が、仁寿と改元した六月十三日は、聖人の誕生の時であると説いた。そして、まさに仁寿元年六月十三日に発願されたのが舍利塔事業であり、文帝にとっては、改元によって聖人として再び誕生することが、仏教に対する篤い信

仰の発露であるとともに、それまでの仏教興隆事業の延長線上に意図された、阿育王・轉輪聖王としての更生であった。この事業については南朝の影響や、文帝が轉輪聖王として称賛されていたことが背景としてあるものの、⁽⁴⁾それだけでは仁寿元年に始められたことが説明し得ない。仁寿改元とともに、このような事業がなされたのは、上述の理由のみならず、袁充の言葉が深く関与したからであったと言える。

- 1 山崎宏「隋の高祖文帝の仏教治国策」(『支那中世仏教の展開』清水書店、一九四二年)
- 2 塚本善隆「隋仏教史序説」(『著作集』第三卷、大東出版社、一九七四年)、藤善真澄「北齐系官僚の動向」(『道宣伝の研究』京都大学学術出版社、二〇〇三年)
- 3 『続高僧伝』卷二十六、釈道密伝。
- 4 例えば『歷代三宝紀』卷十五・上開皇三宝錄表に「伏惟陛下应运秉図、受如来記、紹輪王業、統閻浮提。」(T49, 120a)とある。

〈キーワード〉 隋、文帝、袁充、仁寿、舍利塔

(大谷大学大学院)